

イスラエル・ユダヤ・中東がわかる隔月刊雑誌

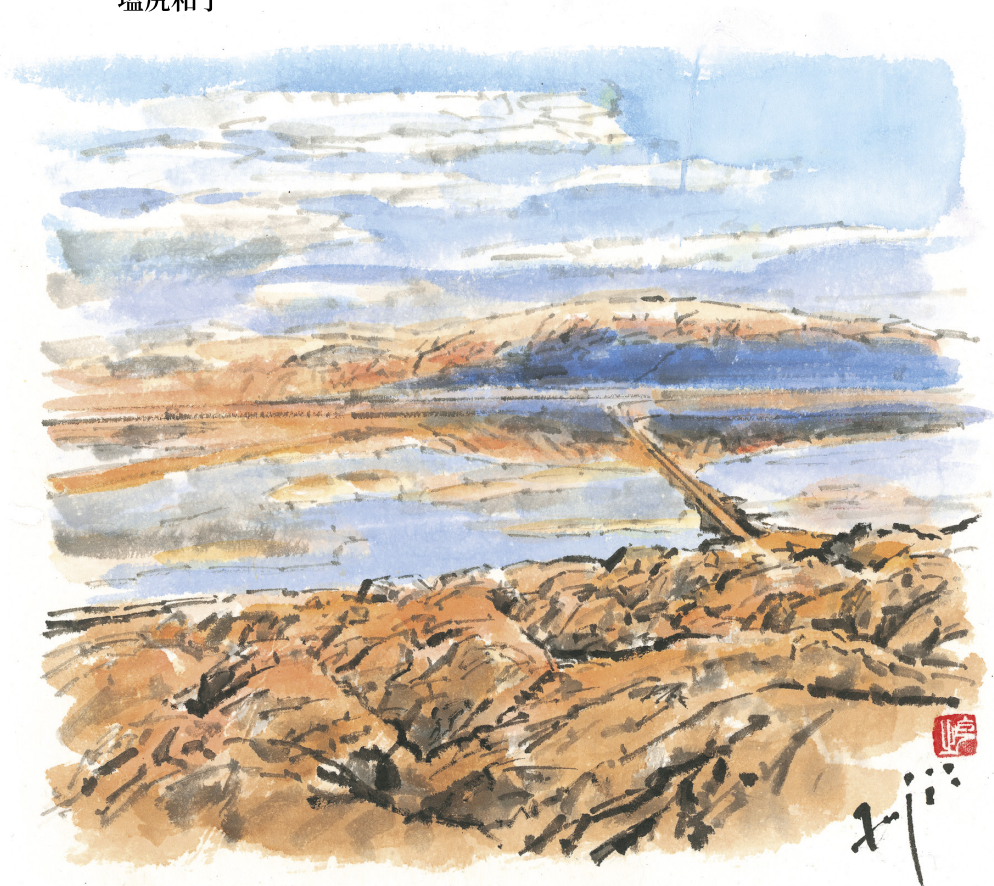
みるとす

No.177

8

2021

❖一つの神と三つの宗教
一神教を学ぶために
塩尻和子



❖インタビュー

自らを投影する鏡

井川アティアス翔／戸澤典子

読者から届いたミルトスの便り



岩田康寛（愛知県）

主の使いはミルトスの
木立の間に立っていた。
(ゼカリヤ書 1:11)



弊社の
ミルトス（東京都）



林多恵子（東京都）



ミルトスはイスラエルに育つ低木。常緑でその葉は芳香を放ち不死と成功の象徴とされた。(イザヤ 41:19)

■ 中東・イスラエル情報

■イスラエル並びにユダヤ人に関するノート■

米国のアフガニスタン政策 —— 佐藤 優 5

■イスラエル 多角多論■

ベネット新首相とネタニヤフ政権の凋落 —— 齋藤真言 12

■日本の非常識からみた中東の非常識■

パレスチナが抱く幻想 —— 滝川義人 20

■一つの神と三つの宗教■

一神教を学ぶために —— 塩尻和子 24

■インタビュー■

自らを投影する鏡 —— 井川アティアス翔／戸澤典子 32

■知っておきたい中東・イスラム■

中東の衣装 (3) —— 光永光翼 68

新連載

● 聖書・歴史

●創世記の世界—歴史に照らして聖書を理解する●

第13章 ヨセフ (4) —— ナフム・サルナ 38

●サムエル記講話●

王になったサウルとサムエルの決別 —— ラビ・ベニー・ラウ 52

▲ エッセイ

▲聖書の世界 エッセイ▲

静寂 —— 池田 裕 43

▲イスラエル御馳走帖▲

テルアビブで非コシエル料理を —— 越出水月 64

▲イスラエル音楽家との出会い▲

ヨッスイ・グリーンさん (上) —— 村上義弥 72

表紙の絵:「アブラハムの故にロトは救われた」(ソドム、創 19:29)【画・藤井克之】

ユダヤのユーモア 4

聖書の人物紹介 50

教えて!ヘブライ語 60

シネマレビュー 62

ブックレビュー 78

声のひろば 79

編集後記 82

米国のアフガニスタン政策

佐藤 優



〔撮影：森清〕

9・11テロで始まった米軍駐留

Z君、私は米国のバイデン政権のアフガニスタン政策に不安を覚えていきます。まず、背景事情について説明します。

2001年9月11日の米国同時多発テロを引き起こしたアルカイダは、アフガニスタンのタリバーンと連携していました。そのためテロとの戦いで、米軍がその後ア

フガニスタンに駐留しています。

〈約20年間にわたるアフガニスタン駐留から米軍が完全撤退するのを前に、バイデン米大統領とアフガニスタンのガニ大統領が（6月）25日、ホワイトハウスで会談した。米国は経済支援などを継続させると表明したが、現地では反政府勢力タリバーンが支配を広げており、米軍撤退後の戦闘激化への懸念が高まっている。／バイデ

ン氏は撤退後に向けて「アフガニスタン人が自らが望む将来を決める必要がある」とした上で、「無意味な暴力は止めなければならぬ。非常に難航するだろうが、我々は寄り添っていく」と述べた。これに対し、ガニ氏は「決意と団結、パートナーシップによりあらゆる困難を克服する」と語った。〉

（6月27日「朝日新聞デジタル」）

イスラエル多角論 44

ベネット新首相と ネタニヤフ政権の凋落

齋藤真言

揺れる国会

7月6日未明、クネセツト（イスラエル国会）で夜通し議論された国籍法（1年の時限法）の有効期限再延長決議が賛成59、反対59、棄権2で過半数に達せず可決されなかった。先立つ6月13日に2年間で4度目の総選挙の末に誕生したベネット&ラピッド新政権は、発足直後から難しい連立運営の舵取りに直面した。

この国籍法（別名・家族統合法）は、

2003年8月にアリエル・シャロン首相率いる与党（ヘリクード）が制定した1年期限の時限法である。通常イスラエル人以外がイスラエル国籍者と婚姻関係を結ぶとイスラエル国籍または定住権を取得できるが、ガザ地区および西岸地区のパレスチナ人には自動的に国籍や定住権を与えないという法律で、パレスチナ人のイスラエル国内流入を防ぐのが目的である。イスラエルの左派およびアラブ政党からは、婚姻の自由を阻

む人権侵害であると反対意見が続出。一方（ヘリクード）をはじめとする右派は、安全保障や国内人口比率の観点からパレスチナ人の流入阻止は喫緊の課題であると訴えた。

しかし7月6日の国会決議では、ベネット首相が党首を務める（ヤミーン）から反対1票、政権側のアラブ政党（ヘラーム）（4議席）の2人が棄権、その他の野党は張本人の（ヘリクード）を含めて反対票を投じた。発足したばかりの政権を不信任決議に持ち込むための作戦である。

スタートアップ企業で成功を収めた後、政界に飛び込み、短期間で頂点に上り詰めたナフタリ・ベネット首相は、ネタニヤフ氏との類似性を何かと指摘されている。本号では、ベネット氏が首相に任命されるに至った道を人物像と共に見つつ、イスラエルの政局を振り返ってみたい。

日本の非常識からみた中東の非常識

パレスチナが抱く幻想

——同じ夢を見るアラブの宣伝マン

滝川義人

○知らないことを教える教師

日刊ゲンダイが、大人の基礎ノート・五分でわかる世界史編「パレスチナ問題」を、2回に分けて掲載した。著者は、都立立川高校の世界史教師、津野田真一とあるが、内容はアラブのプロパガンダである。

第1回は2021年6月9日付で、「元凶となったイギリス・罪深い三枚舌外交と解決丸投げ」と題す

る記事。2枚の写真が対比する形でのっている。右は、ナチに連行されるユダヤ人婦女子の写真、左が雑然とした家の中庭にたたずむ女兒で、「2001年にレバノンの首都ベイルートの難民キャンプでパレスチナ人の少女を撮影したものです。時期と地域は異なりますが、なぜ子供たちがこのような目に遭うのでしょうか」と津野田氏は書いた。

記事は、ディアスポラにおけるユ

ダヤ人迫害、シオニズム、ホロコーストを順に概括し、分割の項で、パレスチナ側に不利な分割決議を後盾に、「ユダヤ人勢力は軍事行動を始め、パレスチナのアラブ人に対する一掃作戦を実施……中東戦争勃発以前から、パレスチナ難民は生まれていた」とし、さらに第一次中東戦争で100万近い人々が難民となったと書いた上で、「迫害されてきたユダヤ人が、今度はパレスチナの人々を迫害する側に回るといふ、やりきれない現実があった」と結んだ。

この人は、1940年代後半にアラブの不正規軍が、そしてイスラエルの独立と共に侵攻したアラブ正規軍が、現地アラブ住民に対してどのような対応をしたのか、全然触れていない。恐らく知らないのだろう。

独立前の紛争と第一次中東戦争では、ユダヤ人住民も多大な影響を受

一 神教を学ぶために

塩尻和子

【編集部より】 本号より筑波大学名

誉教授・塩尻和子氏に一神教について連載いただきます。同一の伝統に基づく三つの宗教を俯瞰し、その共通点や相違点を学び、グローバル時代における文明間対話と平和的共存の可能性を探っていきます。筆者はイスラームが専門ですが、ユダヤ教やキリスト教にも造詣が深く、本連載を通して今日の世界に新たな視点を与えてくれることでしょう。

● コロナ禍の陰で

今日、世界では、先進的で民主的だと期待される国々に、相次いで自国中心主義的な風潮が生じている。その陰では、今日の世界ではあつて欲しくないような、ある種の変化が起きようとしている。これがどのよいうな変化なのか、まだ明らかにされていないが、その予兆は、ちょうどこの時期に世界的に蔓延した新型コ

ロナウイルスによるパンデミックに乗じる形で、同時進行的に流布しているとみられる。残念なことに、コロナ感染への対応に汲汲とする私たちには、その変化に気づくことは難しい。

重要な点は、その変化の多くは一神教、特にキリスト教の信者が多い欧米の国々から発生していることである。そして表向きには、いくつかの深刻な国際問題の原因を宗教対立・宗派対立に置き換えて、一般大衆の意識の裏で紛争や混乱を長引かせる政策がとられるようになっていく。実際に私たちの身近なところでも、少しずつ変化が起きているが、それは急激な変化ではないので、多くの人は気づかないままに日々を過ごしてしまうかもしれない。これまでも世界の歴史が動くときには、そんな些細な変化がきっかけになるこ

▼インタビュー▲

自らを投影する鏡

井川アティアス翔

戸澤典子

《INTERVIEW》

【編集部より】「初めまして。私たちは、日本生まれ・日本育ちでイスラエルの移民を研究している戸澤と、父親が日本人、母親がモロッコ系イスラエル人で、日本生まれアメリカ育ちの井川が立ち上げたグラフィックノベル制作ユニットBavariaです」というメールが編集部に届きました。これは面白い！一体どんな人たち？どんな活動？ということ、お2人に話を聞きました。

▼互いの接点▲

——まず自己紹介をお願いします。

井川 私の母親はモロッコ系イスラエル人で、父親は日本人です。東京で生まれて6歳からアメリカで暮らし、小学校から大学までアメリカで学びました。その後イスラエルに渡ったのですが、今考えると偶然の積み重ねで、きっかけは7年前でした。2014年のガザ紛争の直前、妹がイスラエルに住んでいたのに行きたくありません。やがて戦闘が始まり、ショックを受けたのと同時に危機感のようなものが芽生えました。アメリカに帰ってもそのショックがずっと残っていました。

その後、イスラエルとパレスチナの歴史や現状について学ぶプログラムに参加するため、イスラエルに半年間住むことになりました。祖父がベエルシェバに住んでいるので、毎週安息日シャバトには会いに行き、ユダヤ教の祭日も共に過ごしました。そこには叔母さんたちもいて親族が集まるのがとても心地良く、家族とはこういうものだという体験をしました。イスラエルへの危機感や家族への気持ち募り、2017年にイスラエルに移住しました。「とりあえず住んでみよう」と思ったんです。今

第13章 ヨセフ (4)

〈創世記37章〜50章〉

ナフム・サルナ

◆ゴシエンへの定住

エジプト定住の一次的性格は、聖書の中に繰り返し強調されている。息子を訪ねに行くよう勧められた時の、ヤコブの最初の反応は、このことを全く明らかにしている。

「よかった。息子ヨセフがまだ生きていたとは。私は行こう。死ぬ前に、どうしても会いたい」(45・28)

ベエル・シエバを通り過ぎる際に、ヤコブは幻を見る。その中で、神は族長の躊躇や恐れを追い払うよう試みており、イスラエルがカナンに帰還することを彼に確約している。

「エジプトへ下ることを恐れてはならない。わたしはあなたをそこで大いなる国民にする。わたしがあなたと共にエジプトへ下り、わたしがあなたを必ず連れ戻す」

(46・3〜4)

この神による伝達は、エジプトへ下ることが、親族訪

静寂

池田 裕

●梅雨雲

突如発生し、あっという間に地球上に吹き荒れ蔓延した歴史的大嵐、新型コロナウイルスのため、社会や学校で予定されていた様々な文化的イベント・スポーツ関連行事がキャンセルされ、人びとは仕事や活動の場所を失った。世界中のアスリートたちが集まる東京オリンピック2020も中止、そうなるはずだったが、安倍前首相の「われわれは完全な形で実現する」の強い決意に満ちた言葉等に押されて1年延期となった。

オリンピックは延期されたが、新型コロナウイルスのほうの勢いは一向に収まらない。不要不急の外出は控え

ましょう。飲食店での飲酒はもちろん、複数のお仲間との食事もお控えください——国民に向かって繰り返し呼びかける大臣たち。都知事はもっと強く具体的に、都外の方は東京においてにならないようお願いします、と声を枯らして訴える。

人びとも、少なくとも最初のころは、その訴えに努めて応じようとした。日本列島の状況を上空から眺めていた梅雨雲までが、なんとか都知事に協力しようと思ったか、関東地方の梅雨入りは例年より1週間遅かった。

「東京に來ないで」律儀に守る梅雨 世喜

しかし、日照りや水不足を招かないため、いつまでもそうしているわけにはいかない。梅雨雲は東日本向け

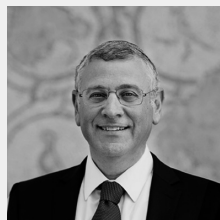
サムエル記講話

《サムエル記上11〜12章》

王になったサウルと サムエルの決別

ベニー・ラウ

(那須雄二訳)



הרב בני לאו

●アンモン人ナハシュ

11章にはアンモン人ナハシュとギルアドのヤベシュでの戦いが記されています。この戦争が起きたために主の霊がサウルに臨み、彼は本物の王に変わりました。

さて、アンモン人ナハシュが攻め上って来て、ギルアドのヤベシュの上に陣を張った。ヤベシュの人々は皆ナハシュに言った。「私たちが契約を結んでください。そうすれば私たちはあなたに仕えます」。アンモン人ナハシュは言った。「これによ

ってお前たちと契約を結ぼう。すなわち、お前たち全員を右目をえぐり出し、それで全イスラエルに侮辱を与える」
(11章1〜2節)

これは紀元前11世紀後半の出来事です。それより数十年前、ギルアド出身のエフタが活躍してイスラエルがアンモン人の地に攻め込みました。そしてヨルダン川東岸に住むルベン族とガド族は50〜60年間、この地方で平穏に過ごしていました(士師記11章)。ところが、アンモン人ナハシュ王は長い平和を破って攻撃を

再開し、ギルアドを占領します。
なお、クムランで発見された死海写本には、この出来事がより詳しく描かれていることがあります。

「ギルアドの人々がナハシュ王に貢ぎ物を持って来なかったため、ナハシュ王はガドとルベンの部族に圧力をかけ、彼らの右目をえぐり出した。それでヨルダン川東岸にいる全イスラエル人のうち、アンモン人の王ナハシュに右目をえぐり出されなかった者は7千人だけだった」(注・目をえぐり出すとは奴隷にすることの意。士師記16・21等参照)

テルアビブで 非コシエル料理を

越出水月

❖ 厳かなエルサレムの安息日

イスラエルはユダヤ教国家だから、すべてのレストランやスーパーマーケットが、ユダヤ教の食事規定コシエルを遵守した食事を提供しているんでしょう？とよくきかれるが、答えは「都市によって違うかな」といったところ。

やはり聖地エルサレムは宗教的に敬虔な人が多く住んでいるため安息日は町全体が静かになり、レ

ストランも商店も閉めるところが多い。ただ観光の町でもあり、キリスト教やイスラム教の聖地、居住地でもあるので、東エルサレムのパレスチナ地区や繁華街である

新市街のレストランやカフェ、バーはちらほら開いている。そういう店は安息日に閉店するための違約金を払っているらしいが、他の店が開いていない分観光客がちらほらと入っていて、私も友人が日

本から遊びに来た時などは重宝した。最初に留学した2007年に比べて最後に訪れた2017年には増えているような気がした。

飲食店が国の規定によって閉店するというのは、なんだかコロナウイルスによる緊急事態宣言下のようだが、規定するものへの信念や信頼があるかないかでこうも心情が変わるものかと感じる。レストランや店が開いていても、低音で響く厳かな雰囲気が流れているような町である。

❖ 都市によって違うカラー

一方で、経済の中心テルアビブは安息日も食事規定もお構いなしの店が多い。安息日である金曜の日没から土曜の日没までも、人々は街に繰り出しのんびり散歩してはカフェでおしゃべりしたり、バ

中東の衣装（3）

光永光翼

様々なスタイル

アラブ人男性の衣装で真っ先に思いつくのは、「カファイヤ」だろう。中東の伝統的なヘッドスカーフで、コットンやリネン製の1メートル四方の布を対角線で折って二等辺三角形にし、その底辺側を前にして頭に巻くあの被り物である。その上に「イカール」と呼ばれるヤギの毛で作った黒いバンドを載せて留めるのが一般的なスタイルである。

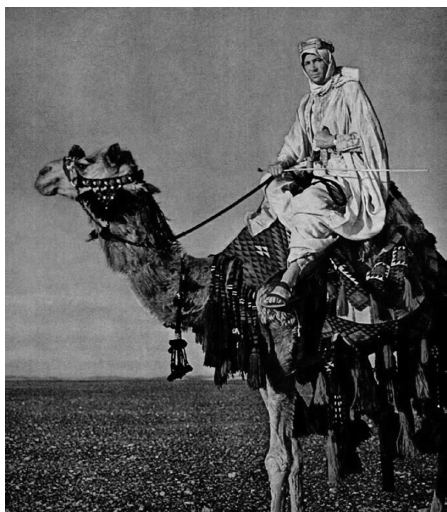
頭に被れば帽子になり、中東の強い陽差しから守ってくれる、顔に巻けば砂埃から守ってくれるマスク代わりになる。首の周りに巻くと防寒のマフラーの役割を果たしてくれ、腰に巻けばベルトになり、広げればひざ掛けに、また物を包む風呂敷にも変身する。これ1枚で重宝する便利グッズなのである。

映画「アラビアのロレンス」では、主役のイギリス人将校が頭に白いカファイヤを巻いてラクダに

乗っているシーンが有名だ。ヨルダンの王族、湾岸諸国のアラブの富豪が被っているのも、色は違えども同じカファイヤである。

インドで有名なターバンのように頭の上でがっちり固定することなく、後頭部のほうに布を垂らすのが特徴である。マフラーと同じで、用途によっていろいろなスタイルの巻き方がある。高貴な人

アラビアのロレンス



ヨツスイ・グリーンさん（上）

——友情が繋いでくれたご縁

村上義弥

◆ ルーベンさんからの電話

1996年5月下旬、最初の取材を始めて半年が経とうとしていた。（イスラエル音楽家に1人も会えなかったでしょう……）と不安でたまらない状況からのスタートだったが、イスラエル音楽著作権協会のハニーさんや音楽プロデューサーのハナン・ヨベルさんが次々と紹介してくださり、気がついたら30名以上の方に取材することができた。半年前には想像もできないことだった。

「イスラエルには不可能という文字はない」と言っても過言ではなく、志があれば道は開ける。そのことを、身を持って体験させてもらった。イスラエル滞在も残すところあと半月。私はエルサレムの部屋で、今までの取材メモや資料、写真などを整理しつつ、この半年間を振り返っていた。

そんな時、銀行員でミュージシャンの活動をしているルーベン・スイロットキンさん（2013年2月、4月号）から電話がかかってきた。この方はとてもフレンドリー

でユーモアにあふれており、私の心の支えになってくれた1人である。その友情は今日に至るまで変わらず、例えば日本で災害があった際には、イスラエルの速報を見てもすぐに電話をかけてこられる。しかも時差を考慮し、こちらの夜の時間にかけてくれるのである。「ヨシヤ、大丈夫なんだね。安心したよ」

そう言って電話を切る。とても優しい方で、私が病気になった時には電話越しに祈ってくくださったこともあった。

○ ギャラリー「イスラエルの風」が贈る今月の一枚 ○



「沙漠の夕景(パラン)」 撮影・平岡真一郎

イスラエル南部の地パラン。探索中、車が砂にはまったり悪戦苦闘する中、花咲く沙漠にアカシアの木が夕日に映える光景に出くわした。沙漠は何もない無味乾燥な地と思われがちだが、とても美しく生命に満ちている。

★手漉き和紙にプリントした、絵画のような独特な雰囲気をもつ作品です★

サイズ

43×34cm ⇨32,000円
49×39cm ⇨38,000円

制作元：ギャラリー「イスラエルの風」
〒183-0042 東京都府中市武蔵台 2-18-24

お問合せは
ミルトスへ

写真展

イスラエル リモートツアー 8月14～29日 東京銀座・教文館3階にて開催！
沙漠の宗教ーアブラハムの旅 〈10～19時〉(日曜は13時～) ※状況により時間が変更になる場合があります。

好評の新刊

障がい児と 家族に自由を

イスラエルの支援施設シャルヴァの夢

カルマン・サミュエルズ〔著〕

徳留絹枝〔訳〕

障がい児と 家族に自由を

イスラエルの支援施設シャルヴァの夢

カルマン・サミュエルズ〔著〕

徳留 絹枝 訳



「無数の夢を胸に抱いてこそ、
私たちは世の中を変える旅路に
踏み出すことができる」

著者カルマン・サミュエルズの長男ヨシは、生後11カ月で受けた欠陥ワクチンにより視聴覚を奪われ、沈黙と暗黒に閉じ込められた。カルマンと妻マルキはヨシと共にこの悲劇を乗り越え、最高の奇跡を起こすことになる。近所に住む数人の障がい児を預かることから始めた放課後教室は、やがて世界有数の障がい者支援組織「シャルヴァ」に成長した。

これまでの30年の道のりは平坦なものではなかった。苦労、挫折、そして家族に話せぬ本音まで、著者がその時々味わった日々を飾らずに書き綴ったヨシとシャルヴァの物語。

四六判・並製 432頁 2,200円 (税込)

● 著者 ● **カルマン・サミュエルズ** 《Kalman Samuels》

1951年バンクーバー生まれ。障がい者への包括的ケアを提供するイスラエル団体「シャルヴァ」の設立者・代表。ユダヤ教ラビ。シャルヴァは障がい者ケアの分野で世界的に指導的立場となり、国連経済社会理事会の公式コンサルタントを務める。バルイラン大学名誉哲学博士。エルサレム在住。

雑誌 89063-08